――鎌倉幕府への奏進から750年――

対談

# 21世紀の『立正安国論』考

日蓮聖人の代表的著作である『立正安国論』は時の政府鎌倉幕府に奏進された。日蓮聖人にとって最初の諫暁であった。今年は750年の節目にあたる。他宗批判の書などと一方的に論じられることもあるが、その主張するところは民衆の苦しみにも向けられている。21世紀、『立正安国論』はわれわれに何を投げかけているのか、現代の『安国論』は可能なのか。行動面を中心にしてお二人に対談いただいた。

（構成／編集部）

## 法華系の占有物にあらず

### 仏法を社会に具現化する試み

**丸山照雄氏**

『立正安国論』について私どもの宗派でも議論されているが、必ずしも共通認識があるとは見えない。そこで個人的なことを述べたい。

まず申し上げなければならないのは、単に法華系宗派のために書かれたものではないということ。750年を経て『立正安国論』を顕彰しようとするとき、あたかも我が宗占有のものという立場で取り上げても国民に響くわけがない。仏教徒全体に日蓮が与えた、13世紀日本における仏教徒全体、ひいてはすべての民衆への呼びかけであり、メッセージであるということを押さえておかないといけない。

それから今日では、日本だけの枠組みで受けとめるわけにはいかない。これだけ地球が狭い共同体社会になっている以上、当然、世界というものを念頭において『立正安国論』の意味を考えるべきであり、すべての仏教徒さらには人類に向けたメッセージであるということだ。

私の解釈では、『安国論』によって仏教の歴史の上で初めて、歴史社会に向かって仏陀の願い、仏陀の誓願をして歴史社会に実現する道筋を明示することになった。つまり仏法の社会化であり歴史化であって、そういう視点から『安国論』の意義を捉え直さないといけない。あえて言えば、歴史というものを考慮しない、あるいは社会というものを対象としない教理思想であった仏教が、日蓮の登場によって仏法を歴史社会に具現化する道を開示したのである。

従って、宗派を問わず、仏法を社会に具現するために日蓮が試みた13世紀日本社会に対する批判と同時に救済の方途の意味を全仏教徒自身の問題として考えていただきたい。750年の歳を経て仏教徒全体に開かれた日蓮の存在の意義を明らかにすべきときに来ているのではないか。

750年経た今日、世界は大恐慌に遭遇しているわけで、こういうときに記念すべき年を迎えるということを偶然として処理してはならない。現代の様々な問題を抽象的に議論することではなく、未来へ繋ぐ希望と可能性を思案しなくてはならない。少なくとも日蓮聖人の心は観念的な政情への逃避を許さないという決意にあった。まさに今遭遇している人類の危機に対して、仏法がいかに現実的救済を目指して、未来社会に向かっての展望を切り開けるかどうか。そういうものを問いかけているのではないかと思っている。

日蓮宗は「立正安国・お題目結縁」というテーマで行動綱領を立てている。最初私は、日蓮宗には「立正安国」のテーゼを立てるほどの用意も覚悟もないのではないかと言っていた。ところが後から、親しい友人がその立案者だと聞いて、突っ張ってばかりはいられなくなった。ならばこの機会に本来の『立正安国論』の意義を、考えるようにしたらいいと言っている。

発題

## 対告衆は一般国民に

### 宗派攻撃の見方は非常に狭隘

**原井慈鳳氏**

日蓮聖人の『立正安国論』は鎌倉期とか特定の宗派のみの思想を色濃くしているのではなく、宗祖は特に一切衆生を相手にしている。『安国論』は北条幕府、先の執権時頼に進覧されたが、これには宿屋入道のアドバイスがあった。比企大学三郎は幕府側に受け入れやすいように、なるべく楷書で書いて、それに直接幕府を攻撃するのではなく問答形式で、禅宗とくに幕府側の宗教である北宋禅を的にしない等を助言したのではないか。むしろ浄土の法然選択集（選択本願念仏集）を的にしている。

「国の規範に正法を」と、宗祖は幕府に進言しているけれども、もっと広いところに訴えていた。いつも速いスピードで文を書かれていたものが、楷書で書かれたというのは、いろんな人に見てほしいからであり、問答形式にして、宗教者でなくても理解できるようにお書きになっている。

もう一つ。方法論では宗祖は、『貞観政要』を重視されたが、これには唐の太宗が一番理想的な政治をしたときに国王と家臣がどういう治め方をしたらいい国ができるかを問答形式で述べてある。宗祖はこの写本を残されるが、これは帝王学であったと思う。北条政子が『貞観政要』を講義させ鎌倉武士に聞かせたというくらいだ。『貞観政要』に諫暁のことがあり、王様は耳の痛いことを聞くべきだと書いてある。

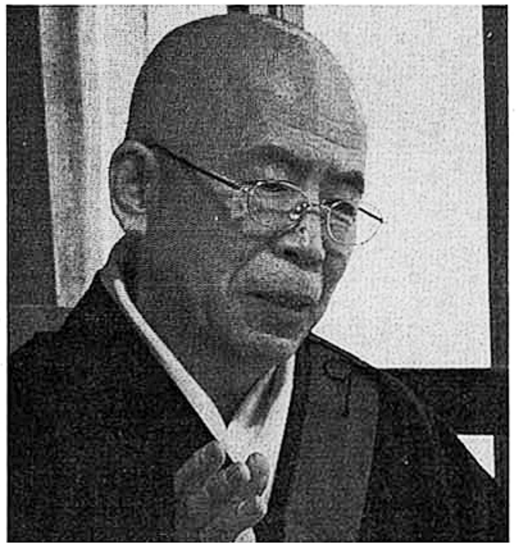
私は宗祖の『安国論』はこの『貞観政要』と非常に関係があると思う。世の民に対してよい治政を行うためにどうか私の意見を聞いてくださいと。一部の宗派を攻めているという見方は非常に狭隘である。『安国論』には国構えに民と書いた漢字（囻）がいくつも出てくるが、万民をさしており、まさに国民という概念を持たれる。天変地異、干ばつがあり、飢饉があり、戦乱・内乱で国民が苦しんでいる。一切衆生を救うためには世人の代表者に対して、根本精神を正してくださいと迫った。

宗祖は出世間的な仏道を説いておられるが、世間の人々の生き方は、仏道を基本にして能所を正していきなさいということ。では、なぜ政治に向けて迫ったのかというと、先ず世間を重視される。「真の仏法を基本にしてください」と。それで『安国論』を差し上げたと思う。「世法の中に仏法を立てよ、その努力で民が安らかになるように」と。私どもはそれを「菩薩行の実践」と捉えている。

立正安国の念願は、国が安らかになることが目標だが、その道筋がはっきりしないので、先ず整然と道筋を正すべきと。法然上人を攻めていることだけが強調されるが、「苦難のこの世を改善する実践を」というのが宗祖のシグナルであったろうし、広く対告衆は一般国民にあるのではないか。

**丸山　照雄**　日蓮宗僧侶　宗教評論家

まるやま・てるお／1932年山梨県生まれ。立正大学中退。ＩＮＥＢ（仏教者国際連帯会議）の創設に関わり、現在顧問。天晴塾・日蓮研究会などを主宰。歴史学者・上原専禄の最晩年に師事し、昨年秋、浄風会本化仏教研究所主催連続講座で「上原専禄の日蓮認識」を講演した。著書多数。



**原井　慈鳳**　法華宗本門流　宗務総長

はらい・じほう／1944年静岡県生まれ。早稲田大学卒。法華宗興隆学林卒。地元沼津市で「緑と歴史を守ろう会」を主宰し草の根の活動を展開中。平成9年、宗務総長に就任。平成19年宗内に菩薩行研究所を設立。初代所長として菩薩行の実践と「環境安国論」を説く。沼津市・妙泉寺住職。

**丸山**　一切衆生という言葉がでました。私は責任の領域という言葉を使うのですが、日蓮聖人は日本という国土をお考えになっていた。狭小なナショナリズムではなく、世界のなかの小国日本ということをきちんと押さえられている。責任においての日本。差し当たっては仏祖によって人々が安らぎを得られるようにと世法を教化する形をとられた。

それから『安国論』を書かれて佐渡に流されてからですが、ご存知のように三大誓願が生まれた。三大誓願は佐渡に流されてからお考えになったのではなくて、『立正安国論』を書かれた時に、「われ日本の柱とならん」と覚悟を定められた。「われ日本」ということの理解は、責任の領域でもある。

**原井**　なるほど。

**丸山**　当時の世界の状況を考えると、モンゴルの拡大があった。日蓮聖人のビジョンの中には、民族とは仰ってはいないが、民族の意識の芽生えがあった。その意味では最初の日本人ではないか。「われ日本の」と言ったのはその現れです。これまた仏教の歴史ではかつてないことで、偏狭なナショナリズムではなくて、文化と責任の問題。つまり社会倫理の問題ですね。社会倫理の問題を具体的に提起されたと理解しています。

### 誤解される宗祖　一部に封印説も

**原井**　宗祖が誤解されるのは、大変厳しい言葉でもって表現されているので排他的であると言われる。日蓮宗の一部の方も、特に第六問答に対しては封印した方がよろしい、という意見が出ていますね。

**丸山**　古くは優陀那日輝。

**原井**　そう。優陀那日輝は幕末から明治にかけての廃仏毀釈の前夜、混乱期ですから宗教が各々法論すべきではないという考え。時流に合わずと仰っている。宗祖のお考えは折伏だと思うのですが、折伏と言うと、相手をやっつけるように捉えられている。そもそも今成元昭先生（立正大学名誉教授）の〈宗祖＝摂受〉説はそこから誤解が生じている。優陀那師は摂受が主流であると言うものの、幕末から明治の時代では、折伏は方法論としてはよろしくない、だから仏縛、祖縛、自縛の三つの縛りから逃れよと言っている。日蓮宗という組織を保つ場合には時流を見れば、摂受であると、そこから出発しているんですね。ですから優陀那師の基本は方向転換なのです。ところが今成先生は、宗祖は本来ずっと摂受だと解釈している。

**丸山**　日蓮宗内でも摂受・折伏論争が教学を一般化するうえで良いことだと、あちこちで今成先生を招いて講演会を開いたり、出版などをしたりしていますが、はなはだ迷惑な話です。

**原井**　それが『立正安国論』が誤解されるもとだと思っています。私ども法華宗が言う折伏とは、本因下種であり仏の種を蒔くことであって、決して某団体のように攻撃したり、法論を挑んだりするものではない。それは化儀の面。本質は化法です。喧嘩することが折伏と思われていて、そこから誤解が生じている。

**丸山**　今成さんの場合、ご自身の生い立ちが日蓮主義的な環境にあった。もっと個人的なことを述べて、私はこう思うんだと仰ってもいいと思うんです。『開目抄』の折伏は後から加えられたものだとも仰る。これでは論にもならない。

**原井**　宗祖は在家と出家をわざわざ分けていらして、在家の場合は考えが摂受であって方法は折伏になると見る。僧侶の場合は、身の行いは摂受であって説くところが折伏。その折伏にも二つあり、教え自体と、布教伝道の折伏がある。それは坊さんの仕事です。ですから教えを広めることが折伏であって、攻撃することではない。

### 折伏は批判に相当　多面的要素を持つ

**丸山**　今風に言えば、批判であって、批判なき社会は非常に退嬰的なものになる。だいたい近代社会は批判のうえに成り立っている。例えば文学の世界で、作品を批判するということは、作品を理解し、評価し、あるいは作者を励まして良き方向に導く。批判はそういう多面的な要素を持っている。ですから折伏も広く捉えて現代に有効なものとして考えたらいい。創価学会のような暴力的な改宗や強制を折伏だと誤解してはいけない。

**原井**　「立正安国」を突き詰めると、〈立正＝妙法〉〈安国＝仏国〉。宗祖の頭の中は、妙法仏国であったと思う。それは完成した存在。しかし立正安国というのは未完成であって、立正から安国に向かうからには努力が必要なのです〈立正→安国〉。そこには見えない矢印があり、それが努力する姿。つまり菩薩行だと捉えています。

## 宗祖は折伏を説かれた　原井

## 包括主義が基本にあり　丸山

――何度か出ましたが『安国論』で法然に対する批判があり、そのことから排他的と見られますが。

**丸山**　日蓮聖人が開顕されたお曼荼羅を見て下さい。日本的存在である八幡大菩薩や天照大神が勧請されているというのは、すべての宗教を包もうという姿勢です。

私は、日蓮聖人の基本は包括主義であると言っている。包み込むのと同時に正法によって一致させる考えがある。もし排他的であるとするならば、例えば浄土教は雑行を捨てて浄土の一門に帰するという考えです。すべてを捨てるという思想は、明らかに排他的。日蓮聖人の思想はまったくそうではない。全体を包もうとする。包みこむために提出されたのが法華経主義だと思っています。ただ日蓮聖人が持っている豊かで大きなビジョンを考えないといけない。日蓮宗だけが良くて他はだめだとなったら包括主義でなくなる。

**原井**　一派の主である日蓮聖人が他派の主を攻めてという構図ではない。それでは狭い範囲の『安国論』で終わってしまう。包括すると言うべきか開会すると言うべきではないか。切り捨ててゆくのではなく摂してゆく、混沌から能所を立て秩序立ててゆくのですね。念仏以外を捨閉閣抛せよ、西方十万億土に行かなければ救われませんよというのではなくて、あなたの足元を見て下さいと宗祖は呼びかけられた。往相回向で向こうに行って仏になった者が還相回向で戻ってきて世の中を良くするというのではなくて、この私たちの生きる娑婆世界を私たち自身がどうするのか。この世の生き方です。

私どもは本因妙ですから、失敗もする修行中の菩薩なのです。上行菩薩を代表格に如来を目指す菩薩ですから相手がある。衆生が基本ですから共に泣き笑い改善を実践する菩薩の行ですね。

**丸山**　救いということで言えば、現実の日本人、一切衆生を救いとろうとしたとき、日蓮聖人の危機感の中に、実は分裂を進めようとしているのが仏教諸宗派であって、それを統一仏教として一致せしめようとするビジョンが日蓮

《3面へ》

《2面から》

聖人にはあったと思う。社会的にも、外国からの侵入に対応するためにも、共同体を固めなければならない。ただし、それは実現しなかった。

### 損得ではなく　利他の規範を

今日ふうに言えば一つの共同体を目指そうということ。地球規模の環境破壊にせよ、貧困の問題にせよ、あるいは紛争解決にせよ、きちんと道筋を立てて行こうとすると、これは厳しい対決が迫られる。そういう厳しさに道筋をつけるのも『安国論』の精神であり、われわれがやることではないか。

**原井**　世の指導者には、哲学や思想がない。話す言葉が暗号や記号の如くになっている。役人が書いたものを読もうとするから読めない（苦笑）。「上下こもごも利をとって国危うし」。孟子の言葉ですが、指導的立場の人も、一般の人も自分の利益を思うから国の利益が危うくなる。これは、宗祖の仰っていることとまったく同じ。損得の規範ではなく仏法に基づく利他の規範が求められる。市場経済原理というのは利益を生まないと価値がない。小泉さん以降、競争原理を働かせよと勇ましく切り込んだのだけれども、結局切り込んだのは病人と弱者に対してであった。

## 深いカトリックの貧困認識　丸山

## 世法に切り込み警鐘鳴らせ　原井

**丸山**　逆ですね。

**原井**　例えば社会保険庁の役人は何億ものお金を喪失させた。これこそ切り込む先です。しかし手がつかず。天下りはやまない。行政改革は進まず、保険証のない人が何万人もいて、自殺者は10年超にわたり年間3万人を超えている。ここに手をつけずに、国土交通省が道路をつくるために68兆円を独占的に使うという。

宗祖の時代、環境問題や金融危機は考えられなかったでしょうが、こんな事態に直面したら破滅だと言って世法に切り込んでいったでしょう。750年を経た今こそ世法に仏法が警鐘を鳴らさなければならない。破滅をもたらす心の危機を説いていくのは宗教であり、仏教であり、日蓮聖人の考えだと思う。

### 社会の矛盾の中で　事実を把握せよ

**丸山**　立正佼成会の機関紙を見ていたところ、ローマ教皇ベネディクト16世の記事が載っていた。年頭メッセージです。タイトルは「貧困と闘い、平和を構築」。読みますと、「貧困は紛争の原因となるが、紛争はさらなる貧困という悲劇的な状況を生む」「経済発展した諸国を含め（世界の）富裕者と貧者の格差がさらに広まった」。そういうなかで富裕な先進国でも自分のなかの指針を見失ってしまっている。

平和の問題にも触れ、「膨大な物的、人的資源が軍事と兵器のために使用されている」。そのためにより貧しくて助けを必要とする人が増えているという。「軍備競争が低開発と絶望を産みだし、不安定、緊張、紛争の原因となる」。世界の金融危機についても述べており、「国際社会、特により貧しい国々が、危機の原因を分析し、調整された解決策を共に実行できるような経済的、法的制度の制定を求める国際協力」が必要であるとのメッセージを発している。これはある意味で現代の『立正安国論』なんです。

このぐらいの現状認識といいますか、このグローバル化された社会ですから、カトリック教会が把握している程度のものをこちらも用意しないと『立正安国論』750年と言っても気恥ずかしい限りです。日本国内を見ただけでも政治・経済・社会とあらゆる分野が矛盾だらけなんです。

**原井**　そうです。

**丸山**　しかも単なる矛盾ではなくて、そのことで苦しみや悲しみを生み出している。そのことをきちんと把握しなければいけない。にもかかわらずお笑い番組を見てお茶を濁している（苦笑）。もう少し真剣に日蓮聖人ほどのことができなくても、世の中のことを学んで、正法を立てるような言論活動をしなければと思うのです。

**原井**　私も日本に8万もの寺院がありながら、なぜ日本人は仏教を知らないのかと思うことがあります。明治の廃仏政策から教育の中での欠落であり、マスコミの怠慢でもあると思いますが、仏教者に意見を聞くとすれば、瀬戸内寂聴さん、玄侑宗久さん、ひろさちやさんたちです。ひろさんの書いたものを読んだら、人生に目標を持つこと自体が間違いだと言っている。マスコミがそういう方を追っかけている。山折哲雄さんは、日本仏教の源流は浄土思想と「川の水の流れは絶えずして」という無常観だと仰る。マスコミが飛びつくところに仏教の真髄が語られているか疑問に思う。

**丸山**　ただ他宗派を見てきた経験から言いますと、今の私たちの宗派は浄土真宗や浄土宗と比べてもレベルが低いんですよ。

**原井**　えっ…。

**丸山**　はなはだ迷惑な人たちの名前を挙げられましたが、しかし、宗教紙誌の編集者はおわかりでしょうが、原稿を書く人がいないのです。私は宗教雑誌をつくろうと何度も企画したり交渉したりしてきました。さて、自分で始めて誰に書かせるのかといった時に、書かせる相手がいない。小説家やジャーナリストに依頼しないと原稿が上がってこない。というぐらいにレベルがダウンしている。

（つづく）